

ゴルフを教えてくれたのも君だった。最初の手ほどきから、多忙の中を正に寸暇を割いて我々と一緒に楽しんだ。ゴルフをやって元気で長生きしようやと言いながら、一時君は五十肩か、ギックリ腰かで、大分我々にサーブスして呉れたが、去年の春頃から攻守所を変えて、我々から巻き上げる様になった。突然変異である。「○○ちゃん馬鹿に調子が良いがどうなっているんだい」と野次ると君は少々てれながら「ベア、実は息子共が長男の音頭でわしにクラブを贈ってくれ、これじゃよ、振って見い。よかろうが」と言いながら、何とも言えぬ嬉しくて堪らぬと云う顔をした。親子四人がかりでは太刀打ち出来ん、好調むべなるかなと、残念ながら全面降伏をしたものだが、君の家族生活の暖かさを物語る一面として今も羨ましく思っている。

尽きぬ思い出の最後に、君が同窓、殊にクラスの連中に何かと気を遣ってくれた事に感謝する。湯の山に遊んだ時、卒業して丁度三十年になる。一つ全国的なクラス会を広島でやろうではないかと君が言い出し直ちに一決、広島の○○君に寄せ書きを送り、その年の秋に卒業後初めて全国規模のクラス会を開く事になった。あれ以来毎秋欠かす事なく開いているが、他に例を聞かない。全く君の提案尽力の御陰だ。

去る○日には東京から○○、○○、広島から○○、○○、○○、京都から○○、九州

から○○の諸君が駆け付けて来たが、その折○○ちゃんに心配させん様今後も毎年必ず続けようと堅く誓いあった。安心してもらいたい。そして同窓相より、「○○ちゃんを偲ぶ」同窓会特集号を作る事を申し合わせた。近く君の墓前に捧げるつもりでいる。何にもまして君が喜んで呉れると思う。

訣別に当り、君が最も愛唱した寮歌遠征歌の一筋を朗読する。  
安らかに眠ってくれ。

征旅遠く雲晴れて

真紅に沈む夕日影

旌旗は高く血に燃えて

命の調べ颯爽と

我等が胸に踊るかな

平成○年○月○日

○○○○高等学校同窓生

友人代表 ○○○○